

サムエル記第一7章2-3節 「方法から目的とする神」

1A 忠実な管理者

1B 主から任されたこと

2B 忍耐と勤勉

3B 主による実

2A 形だけの奉仕

1B 奉仕から心が離れる時

2B 初めの愛

3B 霊的な姦淫

3A ペリシテ人への勝利

1B 神の箱にある力？

2B ペリシテ人に対する栄光

3B 受け入れられない肝心の民

4B 主への慕い求め

1C 二十年という歲月

2C 主の忍耐

5B 自分たちの中の偶像

4A 霊の戦い

1B 徒労に終わる諸方策

2B イエスの権能のみによる追い出し

3B 聖霊のバプテスマ

本文

サムエル記第一 7 章を開いてください。私たちは今朝、いつもの聖書通読の学びではなく、違う箇所から学んでいきます。先々週に行われた、カルバリーチャペルの奥多摩でのキャンプをふまえて、そこで主から語られていた内容をふまえて、お話していきたいと思います。7 章 2-3 節をお読みします。「Ⅰサム 7:2-3 **箱がキルヤテ・エアリムにとどまった日から長い年月がたって、二十年になった。イスラエルの全家は【主】を慕い求めていた。3 サムエルはイスラエルの全家に言った。「もしあなたがたが、心のすべてをもって【主】に立ち返るなら、あなたがたの間から異国の神々やアシュタロテを取り除きなさい。そして心を【主】に向け、主にのみ仕えなさい。そうすれば、主はあなたがたをペリシテ人の手から救い出してくださいます。」**」

これは、主の箱、契約の箱が、キルヤテ・エアリムの祭司の家に留まっていて、ずっと後の話です。実に、二十年、経っていました。そして、預言者サムエルが、イスラエルの民に、「あなたがた

の間にある神々を取り除いて、心を主だけに向けて、主のみ仕えなさい」と呼びかけます。イスラエルの民はずっと、ペリシテ人に虐げられていましたが、ここで主が戦いに勝たせてくださいます。

1A 忠実な管理者

今年の、カルバリーチャペルの牧師や宣教師、その他のリーダーたちのためのキャンプのテーマは、「忠実で居続ける」ということでした。私が、カルバリーチャペルのスクール・オブ・ミニストリーに通っていた時から、徹底して教えられてきたことでした。主が戻ってこられる時、この方から次のことばを受ける必要があるからです。「マタ 25:21 よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」わずかなものに忠実であることが、多くの物を任せられるということです。

1B 主から任されたこと

だから主から任されたことに忠実であることに集中します。「Ⅰコリ 4:1-2 人は私たちをキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。2 その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。」忠実であるというのは、それほど多くのことをする必要はないことを意味します。任されたこと以上のものを行う必要はないし、またそれ以下であってもいけないですね。主人に言われたことを、そのまま行うことが、忠実であることです。

私たちは、これこれを行わなければいけないと思い煩ったり、焦燥感にかられたり、強迫観念的になったりしますが、イエスは、最も大事なことは多くはなく、いや、一つだけだということを言われましたね。マルタに対してです。「ルカ 10:41-42 マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。42 しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」マリアは、イエスにもてなしをすることなく、ただ、御足のところで、主の語られることばに耳を傾けていました。必要なことは、この一つなのだよ、と言われました。

私が今でも思い出すのは、教会でいろいろ問題が起こっている時、悩んでいたら、カルバリーの牧師から、「でも、清正は、召されて牧会しているんだよね。だったら、それをそのまま続けるだけじゃない？」主は、言われていること以上のことをしなさいとは言われていないのです。

2B 忍耐と勤勉

そして、忠実であるには、信じて、希望をもって忍耐を働かせることです。「ヘブル 10:35-36 ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはいけません。その確信には大きな報いがあります。36 あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは、忍耐です。」そして、しっかりと地道に取り組むことです。主は、信じて、しっかりと仕える者を決して忘れてはおりません。「6:11-12 私たちが切望するのは、あなたがた一人ひとりが同じ熱心さを示して、最後

まで私たちの希望について十分な確信を持ち続け、12 その結果、怠け者とならずに、信仰と忍耐によって約束のものを受け継ぐ人たちに倣う者となることです。」

3B 主による実

そうすることで、私たちの行っていることは、実は私たちが行っていることではなく、主ご自身が私たちを通して行われます。私たちはただしもべであり、主人の言われることを行っているのですから、責任はすべて主人にあります。私たちが結果を出す必要はありません。主人がその結果を出します。主が、忠実な者によって、多くの収益を得るのです。実が結ばれるとは、そういうことです。自分は言われることを行います。しかし、その成長をさせるのは主なのです。種を植え、それが育ち、水をやり、肥料も与えますが、成長させるのは主なのです。

2A 形だけの奉仕

このように、しっかりと行うところに、主のしもべの姿があります。しかし、この奥多摩のリトリート、あるいはキャンプにおいて、強く示されたことがありました。リトリートでは、セッションと呼ばれて、聖書からの分かち合いと、その後にスモールグループで分かち合いをします。けれども、二日目の夜と、三日目の夜は、アフターグローをします。聖霊のお働きを待ち望み、与えられた御霊の賜物を用いて、それぞれ仕え合うのです。賜物を用いることによって、自分がその人に触れるのではなく、主ご自身の御霊が触れてくださいます。御霊がみこころのままに働かれるままにする時です。実は、今回のリトリートでは、これが一番良かったのではないかと思います。

1B 奉仕から心が離れる時

というのは、忠実になるということに中に、形だけになって、心が伴わないで、ただ同じことを繰り返していることが起こりえるということです。イエスご自身が地上に来られて、心が離れているけれども、形は主に仕えているように見える姿を、叱責されました。弟子たちに、手を洗っていないと批判したパリサイ人と律法学者に対して、主はこう言われました。「マル 7:6 イザヤは、あなたがた偽善者について見事に預言し、こう書いています。『この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。7 彼らがわたしを礼拝しても、むなしい。人間の命令を、教えとして教えるのだから。』」口先で敬うだけで、心は主から遠く離れているということがあり得るのです。

2B 初めの愛

しっかりと忠実に物事をこなし、忍耐を働かせて行っていることについて、何ら間違ったことはありません。しかし、主イエスの愛に触れられて、それで行っているのではなく、必要があって、あるいは誰かから頼まれて、一つ一つをこなしていたら、機械が動くかのようなものになってしまいます。イエスは、エペソにある教会がそのようなになっているのをご覧になって、叱責されました。彼らの忍耐の働きをほめられました。けれども、こう言われます。「黙 2:4-5 けれども、あなたには責めべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。5 だから、どこから落ちたのか思い起

こし、悔い改めて初めの行いをしなさい。そうせず、悔い改めないなら、わたしはあなたのところに行って、あなたの燭台をその場所から取り除く。」

奥多摩のリトリートで、私自身が訳した、リック・バーネットさんのお話で、次のようなものがありました。「奉仕に忠実であり続けるための鍵は、期待、プレッシャー、緊張を管理することを学ぶことです。」「溢れ出る愛から主に仕えることが正しい道である」ここです。イエス様の愛に触れられて、そこから出てきた奉仕、主を愛しているからお仕えするということに留まっているべきだ、ということです。あらゆる要望や願い、必要にただ反射的に答えているだけでは、その奉仕はいつのまにか、機械的なものになってしまうということです。

イエスが祈られている場面がマルコ 1 章に出てきます。「1:35 さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。」なぜ、朝早く、暗いうちに祈られていくのか？と思いましたが、次にこう書いてあります。「1:36-37 すると、シモンとその仲間たちがイエスの後を追って来て、37 彼を見つけ、「皆があなたを捜しています」と言った。」ここです。イエスを捜している人々がおり、その必要が一気に出てくる前に、父との時間を取るために朝早く、まだ暗いうちに起きて、祈られたのです。主は、父なる神の愛を受けて、それで人々に接するようにされました。

3B 霊的な姦淫

さもないと、すべての敬虔と呼ばれることがら、祈りであったり、施しであったり、献金であったりするものが、人に見せるために成り下がってしまいます。主の愛から出たものではなく、ただ与えられているものをこなしたり、人から言われていることを行ったりしていたら、パリサイ派や律法学者についてイエスが語られたように、人に見せるためだけのものとなってしまいます。

イエスが、パリサイ人に対して、「姦淫の時代」という言葉を使われました。「マタ 16:4 悪い、姦淫の時代はしるしを求めます。しかし、ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられません。」なぜ、その時代が姦淫の時代と呼ばれたのでしょうか？これはもちろん、肉体における姦淫ではなく、霊的な姦淫です。聖書では、神以外のものを拝む時に、霊的に姦淫を犯しているということになります。けれども、彼らは、人が造った偶像を拝んでいません。では、なぜ姦淫の時代と呼ばれるのでしょうか？

それは、神に向き合わずに、自分に与えられていることをただ業務であるかのようにこなす、神ご自身を求めず、神を利用して、自分の生業にしまっているからでしょう。神は、自分が生きるための道具になり、手段になってしまっているからではないでしょうか？自分の心には、頑なさがあり、その中心に、しっかりと自分が居座っているからではないでしょうか？木や石、また金銀で造られた偶像はありませんが、自分の思いや心の中に、まことの神ではない、他の神々をあがめてし

まっているからではないでしょうか？

3A ペリシテ人への勝利

そうやって考えてみると、イスラエルの子らが、ペリシテ人と戦った時に、初めは見事に負けてしまった理由がわかります。

1B 神の箱にある力？

時は、士師の時代です。サムエルが最後の士師、預言者ということが出来ます。士師の時代は、「それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。(21:25)」と士師記にあります。そして、主を口ではあがめています、自分の家には偶像があるなど、滅茶苦茶でした。

そんな中で、ペリシテ人がイスラエル人に攻めてきました。彼らは、どうしたのか？「Ⅰサム 4:3 兵が陣営に戻って来たとき、イスラエルの長老たちは言った。「どうして【主】は、今日、ペリシテ人の前でわれわれを打たれたのだろうか。シロから【主】の契約の箱をわれわれのところに持って来よう。そうすれば、その箱がわれわれの間に来て、われわれを敵の手から救うだろう。」」

そうです、神の箱を持っていけば、神が我々を敵の手から救うだろう、と言ったのです。これは、まさに、「これこれをすれば、神がしてくれる」という、神を自分たちの目的を達成するための手段にしていたのです。けれども、ぼろぼろに負けてしまい、しまいには、神の箱はペリシテ人に奪われてしまいました。

2B ペリシテ人に対する栄光

けれども興味深いことに、神の箱によって、神はペリシテ人に、ご自分の栄光と力を示されました。彼らの神、ダゴンに倒れて、彼らには腫瘍ができて、恐怖をもたらしました。それで牛の車に乗せて、牛に運ばせて、それが、境にある町、ベテ・シェメシュに到着したのです。

3B 受け入れられない肝心の民

彼らは喜びました・神の箱がやってきたのですから。ところが、彼らは打たれて、死んでしまいました。なぜなら、「主の箱の中を見たからである。(6:19)」とあります。

ここに、大きな教訓があります。神の箱は求めていましたが、聖なる神ご自身をお迎えするのは、耐えがたいことだったのです。私たちにとっての警告であります。私たちは、何とか主が力強い働きをしてほしいと願います。リバイバルを！など叫びます。けれども、主ご自身が聖なる姿で臨まれたら、私たちは耐え難くなってしまうのではないのでしょうか？

それは、自分たち自身がまだ、神ご自身を実は求めておらず、神ご自身が働かれるより、自分

たちが何か活動をしたり、動いたりして、それで神が何とか働いてほしいと思っているからではないでしょうか。神に仕えているようで、実は自分たちのプログラムをしているのではないか？

4B 主への慕い求め

1C 二十年という歲月

そんな問いかけをし始めたのが、おそらく二十年後のイスラエルの人々の姿なのだろうと思います。本文、第一サムエル 7 章 2 節に、「箱がキルヤテ・エアリムにとどまった日から長い年月がたって、二十年になった。イスラエルの全家は【主】を慕い求めていた。」とあります。彼らは、神の箱を持っていった。また、神の箱が戻ってきたので、中を見てみた。そんなことをやって、敗北が続いていました。問題は、ペリシテ人にはなかったのです。ペリシテ人が偶像礼拝者で、神を侮る者たちで、彼らにいかに戦えばよいかを考えていましたが、敵は彼らではなかったのです。

自分たちの間に、偶像があったのです。それが問題でした。主に仕えながら、実は自分自身が神よりも大事にしていることがあり、その心の頑なさが、いろいろやっても空振りに終わってしまう原因だったのです。「もしあなたがたが、心のすべてをもって【主】に立ち返るなら、あなたがたの間から異国の神々やアシュタロテを取り除きなさい」と、サムエルは説きます。

2C 主の忍耐

主は、それまでの間、イスラエルの民をお見捨てにならなかったことがすごいです。彼らが、主を慕い求めるようになっていくまで、その二十年の間、待っておられました。彼らに、ある意味で、ことごとくうまくいかないようにされました。それらを許されました。なぜなら、彼らが自分を捨てて、ただ主を慕い求めるように、促しておられたからです。

5B 自分たちの中の偶像

そして、自分たちの間の偶像を捨てて、それで主のみ仕えたら、主が味方してくださって、ペリシテ人に対して戦ってくださいました。

4A 霊の戦い

同じようなことが、福音書の中でも起こっています。

1B 徒労に終わる諸方策

イエスが三人の弟子たちを連れて、高い山に登られました。そして栄光の御姿に変えられました。それから山を下りると、そこには悪霊につかれた男の子がいました。ところが、弟子たちに追い出してくださいと頼みましたが、できなかったのです。

イエスは、「悪い、不信仰な時代だ」と言われて、嘆息されました。霊を追い出されました。その後

に、弟子たちがなぜ追い出せなかったのかを尋ねました。イエスは、「この種のものは、祈り(と断食)によらなければ、何によっても追い出すことはできません。(マルコ 9:29)」と言われました。

弟子たちにも、悪霊を追い出す権能は与えられていたのです。ところが、負い出せなかった。その姿は、あたかも霊の勢力に対して、いろいろな方法で試みても、対抗できなかった。私たちが、教会で、いろいろな活動をしていても、それで何かうまく行くと思っても、どうにもならないということに似ているかもしれません。

2B イエスの権能のみによる追い出し

しかし、イエスご自身は追い出すことができました。主は他のところでは、「からし種のほどの信仰があれば、山に命じれば動く」と言うことも言われました。つまり、神を信じる、からし種のほどの信仰さえ、なかったのです。イエスご自身の権能さえあれば、この種の悪霊であっても、すぐに出て行くのです。

3B 聖霊のバプテスマ

私たちは、クリスチャンであれば神を信じています。けれども、どれだけ神に飢え渴いているか？ということです。どれだけ主を慕い求めているか？ということです。

奥多摩の集まりでは、アフターグローで、「私たちは、いつも、この集会をしている。それが、マンネリ化してしまって、もう聖霊を受けていると思っている。しかし、聖霊の力を本当に求めているか？」という問いかけがありました。また、ドワイド・ムーディーという伝道者のしたことを紹介していました。彼は、数多くの伝道の働きをし、孤児院も立て、いろいろな働きとその成果がありました。しかし、「私は、聖霊のバプテスマを受けるまで、部屋に閉じこもる」といって、何としてでも聖霊のバプテスマの力を受けなければいけないとして、祈り求めたとのことでした。

主は約束されました。「ルカ 11:13 ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」私たちは、どこかで、自分自身に満足してしまっていて、ただ、クリスチャンとしての行儀作法だけこなしていればよい、というところに留まってしまっていないでしょうか？そうではなく、自分の力ではどうしようもできないという切羽詰まった状況があって、そこで、ただ主に抛り頼み、この方の名を呼んで、そして、聖霊を求めているでしょうか？そつなく、何となく、クリスチャンとしての活動をこなしているのではなく、キリストご自身に介入してくださるように、切に求めているでしょうか？主は、聖霊を与える約束されています。求めましょう。